

ある日のこと電話で「こてえについての資料がありますか?」という問い合わせ。「こてえ?初めて聞く言葉。「ほてえ」様の聞き間違いかともう一度聞き直してみると間違いなく「こてえ」。わからないまま大先輩にバトタッチ。ほっとして席に着くと「アツ」という間にテーブルの上には鰻絵についての資料がずらりと並んでいた。いつの間に…すごい!こんな大先輩達に囲まれながら、只今浦賀の歴史を勉強中です。ちなみに鰻絵とは、左官職人が土蔵などの壁に鰻と漆喰で作り上げたレリーフのこと。先日、早速東福寺本堂の外壁の鰻絵を見学に行きました。鰻一つで作り上げたとは思えないすばらしい作品の数々。しばらく足を止めて見とれてしまいました。ほかにも浦賀にはいくつか鰻絵が残されています。皆さんも一度足を運んではいかががでしょうか。

笑話一題

【歴史講座開講のお知らせ】

歴史講座を開講します。多数のご応募をお待ちしています。

題目 「中島三郎助と浦賀奉行所」

日時 平成21年11月25、12月2、9、16、23(祝)日
(各水曜日 全5回) 13:30~15:30

場所 浦賀文化センター 第3、4学習室

講師 山本 詔一さん(横須賀開国史研究会会長)

定員 60名

応募方法 往復はがき1枚で1名または

返信用はがきをもって来館のいずれか

(返信用はがき、持参のはがきに宛先をお忘れなく)

締切 平成21年11月13日(金)必着

その他 応募者多数の場合は抽選となります。

その際は、横須賀市在住、在勤、在学の方が優先です。

はがきの送り先、問い合わせ先

〒239-0822 横須賀市浦賀7-2-1

浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター)

電話・FAX 046-842-4121

浦賀に奉行所を設置するまでには、海陸の両面からの調査が行われた結果であった。



奉行所跡(昭和60年頃撮影)

広報紙「浦賀文化」は、市役所、各行政センター、各コミュニティセンター、浦賀病院、一部の小学校、中学校、高校の図書室などに置いてあります。

浦賀の植物

アキニレ・秋楡 (ニレ科)

京急浦賀駅から浦賀警察署にかけて道の両サイドに、アキニレが数十本、いずれも若木ですが、十年ほど前に植えられたものと思われま。緑陰樹としての今後の成長が楽しみ。エルムの神話「ニレの木」、「ニレの木陰」の響きからロマンチックな気分を誘うように思われま。ニレはニレ科、ニレ属の植物の総称で日本にはハルニレ、アキニレ、オヒヨウの三種の自生があります。県内に二種、丹沢、小仏山地周辺のハルニレ、丹沢のブナ帯のオヒヨウの自生が確認されています。アキニレの県内の自生は見られま。あるのは植栽さ



浦賀通り、アキニレの街路樹

と茶色が多いといわれています。ダリア、ツバキ、スギなどは黄色ですが、アサガオは白色をしています。花びらだけでなく花粉の色にも興味をもってもらえれば嬉しい限りです。

アキニレの葉はハ

れたものといえます。ハルニレは四月を中心に咲きますが、アキニレの花は今頃の九月〜十月にかけて咲きます。風媒花のため地味な花で本年枝の葉腋に四〜六個黄色を帯びたオレンジ色の花をつけます。花被片は四枚、おしべ四本、めしべ一本かなりなり。ニレの花粉の色は褐色から青色に見え、また緑の花粉もありま。茶色は濃くなると赤に、薄くなると黄色に見えます。太陽光が当たると花粉の色は変わりやすいといわれ、最初のときの色を基に判断しませ。一般に花粉の色は黄色

ルニレに比べて約三分の一くらいで、大きくても長さ5cmどまり、落葉樹にしては小さい葉をしています。葉の形は楕円形で変異が多く、丸みを帯びた単鋸歯縁(ハルニレは重鋸歯縁)で左右が不相称(非対称)、これはニレ科の特徴といわれま。例、エノキ、ケヤキ、ムクノキの葉も非対称。葉表は光沢が見られ厚く少しざらつき、かたく感じま。秋の紅葉時期は見逃せませ。果実は長さ1cm前後で十月〜十一月ごろ緑色をした風に飛ばされ、一すい構造の翼がみられ、一

個の果実に二個の種子が入っています。成熟し茶色に変色しますが、なかなか散布にたどり着きませ。クヌギのように離層の発達遅れから木枯らしの吹く一月ごろに遠くに散布されま。アキニレは葉が小形でよく芽吹き、鮮緑で葉が枝に密につくことなどから園芸愛好家の人気のひとつ。昔、私も東北自動車道のサービスエリアの売店で一鉢買い求めたことがありま。冬に目立つ葉痕も維管束痕が三個あり、ルーペでみると何かの生きものの顔に見え大変かわいく楽しめま。秋に咲くのでアキニレ、春に咲くのでハルニレの和名の由来。ニレはヌレ、滑(滑らかな)意の転、一つはニレに該当する朝鮮語名 nim 転訛説があります。花言葉は威厳、名誉、尊敬。利用としては若芽は煮て水に晒し食す。果実は飢饉のとき食したという。私は食べたことはありません。材は家具、薪炭、建築器具、かじ棒、くりもの。

浦賀奉行所ができた



歴史 語り座・浦賀 ②

郷土史家 山本 詔一

八代将軍 吉宗が行った「享保の改革」の一環で、それまで伊豆・下田にあった奉行所を浦賀に移転することが決まっ。江戸幕府が開府して百年以上たち江戸の人口は町人だけでも五十万人を超え、これに武士が加わると百万人に届く勢いであつた。そしてこれらの人々は自分で自分の食料を確保できない、要するに自給できない人々であつた。

この結果、この調整がうまくできなかつた代官遠藤七左衛門は更迭された。その次に調整役についた代官河原清兵衛が再検分して、二度目の計画案で漸く、現在跡地として残っている奉行所や船番所、役宅の位置まで決定した。

この人々の生活物資の九十%以上が海上輸送によつて江戸へもたらされてい。この商品の流通と物価をいかに統制していくのが、江戸幕府の大きな経済問題であつた。

この結果、この調整がうまくできなかつた代官遠藤七左衛門は更迭された。その次に調整役についた代官河原清兵衛が再検分して、二度目の計画案で漸く、現在跡地として残っている奉行所や船番所、役宅の位置まで決定した。

特に武士の大半は給与をお米でもらつていたので、お米の価格がそのまま生活に影響するため、強い関心を示していたが、実際には自分たちでは何もできず、給与としてもらったお米は自分の家で食べる分だけを残し、あとは米問屋に売り、そこで得たお金で生活をしていたので、すべて米屋に任せているのが実情であつた。

この結果、この調整がうまくできなかつた代官遠藤七左衛門は更迭された。その次に調整役についた代官河原清兵衛が再検分して、二度目の計画案で漸く、現在跡地として残っている奉行所や船番所、役宅の位置まで決定した。

この時代になると東北地方でもお米の生産量が増え、余剰米は大消費地であつた江戸に運びこまれるようになってきた。江戸時代が始まったころには、江戸へ入る商品はほとんどが関西方面からであり、下田の奉行所でも十分に対応できたが、十八世紀を迎えるころには、それだけでは江戸の町への流通や物価を把握することができなくなつてきていたのであつた。

また、引越してくる役人たちには、「立つ鳥跡を濁さず」のたとえのように、下田に借金など残さぬようにとの「触」がでたが、どうも棒引きの願いようみえる。